

約束米がつなく「食べる約束、作る約束」

昨年からはまった「約束米」。新規登録には1万人を超える申し込みがあり、継続利用と併せて約2万1千人が登録、利用しました。

2026年産約束米の募集を前に、産直事業部の小澤マネージャーにお話を聞きました。



産直事業部マネージャー
(野菜・果物・米部門担当)
小澤順一郎さん



「登録米」から産地と向き合う「約束米」に

「登録米」は、2025年度から「約束米」という名称になりました。その背景には、米作りを取り巻く環境の大きな変化がありました。米の価格や需給の不安定さに加え、産地から「この先も米作りを続けていくのか」という切実な声が寄せられていました。

「登録米」は、1993年の米の不作、1994年にかけての米不足を教訓に、不作時でも登録した組合員へ登録した量の産直米を優先して届ける仕組みとして始まり、長く組合員に親しまれてきました。

2024年の米不足を受けて、さらに一歩踏み込んで産地と向き合い、組合員の皆さんと一緒に米作りを支えていくための仕組みとして「約束米」が誕生しました。

「約束米」は、単なる言い換えではなく、東都生協としてどんな姿勢で産地と向き合うのかを示す重要な取り組みです。

夏の草刈り



JA秋田ふるさと
千葉久輔さん
岩手ひとめ天日干し

食べてもらえる約束があると安心できる

「約束米」への名称変更後、産地からは「食べてもらえる約束があると安心できる」「先を見通して作付けができる」といった声が数多く届いています。

組合員が継続的に食べる約束をすることで、生産の見通しが立ち、生産者が安心して米作りに取り組みることができるという形が広がっています。

現在、約束米は53商品に広がり、月に約25,000袋をお届けしています。登録率は約47%。多くの組合員の利用に支えられ、この仕組みが着実に根付いてきています。

約束米があるから、頑張ろうと思える

高齢化や担い手不足、資材価格の高騰など、稲作の現場には厳しい状況が続いているのが現実です。「約束米があるから、もう少し頑張ろうと思える」という言葉に、この取り組みの大切さをあらためて感じます。

産地を訪ねると、生産者の皆さんは「組合員の皆さんが食べてくれるから作れる」と話します。約束米は、生産者と消費者である組合員が、お互いを思い合いながら、日本の農業の未来をつないでいく取り組みです。

次の世代にも、美しい田園風景とおいしい日本の米を残していくために。この“約束”を、これからも一緒に続けていきましょう。



JA新潟かがやき村越輝虎さんと菱木部長補佐

コラム

導入当時のマネージャー・菱木正悟部長補佐より

名称を変えること自体は難しくありません。でも、その言葉にどれだけ責任を持てるかが一番大事でした。

「約束米」という名前は、組合員の“食べる”約束であると同時に、産地に“作り続けてほしい」という私たちの意思表示です。

中身が伴わなければ意味がない。だからこそ、仕組みや思いを組合員に丁寧に伝えることに、一番力を注ぎました。

今月の
つぶやき

夏の涼風を求めて高原キャンプへ。
冷涼な空気の中で耳を澄ませば、都会とは違う夏の鼓動が聞こえてきます。忙しい日常をひととき忘れ、大自然の中で心身を解放するのもいいものです。キャンプのお供には旬の夏野菜とすいかを。内側から涼をとり、火照った体を整えるのはこの時期ならではのぜいたくです。(A.T)

お問い合わせ

産地直結ひとすじ。いちばん頼れる生協に。

総合企画室

☎03(5374)4756 月曜～金曜日：午前9時～午後4時

E-mail: kumikatsu@tohto.coop

〒168-0073 東京都杉並区下高井戸5-4-42 さんぽんすぎセンター2階

東都生活協同組合